

コロナ・デマに惑わされない4つのワクチン

白鷗大学特任教授 (インターネットメディア協会理事) **下村 健一**

今、新型コロナウイルス以上に大学生達の間
に感染が広まっている、看過できないものがある。
それは、コロナにまつわる誤報や不正確情報
の拡散だ。キャンパスでのインフォデミック
(デマ情報の感染爆発)を阻止するという《守り》
の意味からも、この機に情報に翻弄されない眼
力(いわば“デマ・ウイルス”に対する抗体)を獲
得するという《攻め》の意味からも、全ての大
学で今、メディアリテラシー教育の徹底は極め
て緊急性の高い課題となっている。

1. 学生に伝えるべき「情報の3密」▼

4月下旬のリモート授業初日、私は自分が担
当している情報系の授業で、コロナ関連の怪し
い情報に既に振り回された体験があるか、履修
生たちに問うてみた。

「〇〇はコロナに効く、という類の情報を見る
と、すぐ実際に試す」「ロックダウン決定という
ツイッターを本気にし、食料品を買い溜めた」

《情報》も“3密”に要注意!

情報源1つの 密閉情報	いいね急増の 密集情報	友達からの 密接情報
		
窓をひろげて 他の情報も!	「皆言ってる」に 釣られるな!	近い人からは 信じやすい!

図1

career

Kenichi SHIMOKURA ●



1985年東京大学法学部卒、TBSアナウ
ンサーに。「筑紫哲也NEWS23」「サタ
デーずぱっと」等で報道現場歴25年、
受賞多数。2010-2013年、民主・自民
の3政権で内閣広報室審議官等。東京
大学客員助教授、慶應義塾大学特別招
聘教授、関西大学特任教授などを経て
現職。小学国語教科書執筆から出張授業、企業経営者研修
まで、幅広い年代のメディアリテラシー・情報教育に携わ
る。現役若手メディア人向け勉強会「令和メディア研究所」
主宰。著書『10代からの情報キャッチボール入門』(2015年、
岩波書店)、『窓をひろげて考えよう』(かもがわ出版)他。

「近所の店で感染者が出たという噂を聞いて仲
間に話したら、デマだった」——次々に挙が
る事例報告。学生達は、たった1つの閉じた情
報源に依拠した《密閉情報》、「いいね」が急増
している《密集情報》、友達・家族など近い人か
ら来る《密接情報》という“3密”情報に、いとも
簡単に乗せられている。

そこで、厚労省ホームページの“本家”3密へ
の警告表示をもじって図1のスライドを作り、学
生達に注意喚起をしてみたところ、今や彼らも
この言葉には馴染んでいるので、非常にすんな
りと受け容れられた。

①情報源が1つの《密閉情報》

君が出会ったその情報の、発信者は誰だ? そ
の人だけの情報に閉じこもって、大丈夫かな?
ウイルスの感染予防には窓を開けて換気をする
ように、情報も開いた窓から複数取り込んで確
認しよう。……極めて当たり前の事を言ってい
るだけなのだが、これに対する学生達(他大学

でも反応は同様)からの感想文には、こんな告白が相次いだ。

「私は、情報は1つのサイトだけで判断して信じ込んでいました」「調べた情報だけを見て満足していて、発信者が誰なのかは全然意識していなかった」「情報の発信源は誰かなど考えたこともなかったので、とても勉強になりました」。発信源に多少の意識が向く学生でも、「医療関係者からの情報なので確かです、という一文によって」その一文自体の真偽はノーチェックで、ああ医療関係者発なら確かだなと内容を信じ込む。慄然とするが、これが現実だ。

②いいね急増の《密集情報》

例えば若者に人気の芸能人のコロナ感染の噂がSNSに載り、たちまち1万リツイート(情報の転送者数)がワッと集まっているのを見たら、どう判断するか。「みんな言ってるから大丈夫、嘘じゃない」と無警戒で信じ込む? それは、「みんな行ってるから大丈夫、うつらない」と密集場所に無防備で出て行くのと同じくらい危ないぞ。……これに対しても、少なからぬ学生からこういう声が返って来る。

「同じ事を言っている人の数が信憑性に直結していると思っていた」「リツイートの数で情報の正誤を決めていた」

そんな彼らには、私はこう助言する。「そういう時は、人の数ではなく、情報の《種類の数》でカウントしよう。どんなに大勢が言いふらしても、ネタ元がたった1つのコピーだったら、それは『1万』ではなく『1』だから。」

③近い人からの《密接情報》

ある不確かなコロナ特効薬情報を、自分が直接見た場合よりも、その情報を見た家族や友人から「○○だってさ」と聞かされる方が、一段と信じやすい。

「親や部活の指導者、学校の先生などが教えてくれる密接情報は、すべて正しい事だと思っていた」「(情報源の友人は)とてもいい奴だと知っていて、信頼関係があるから疑わない」

このように言う学生には、《デマを流す人》のイメージを転換するよう指導する。

「デマを流す人」のイメージを間違えるな

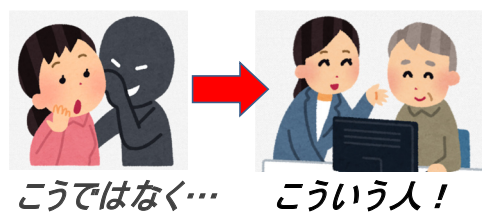


図2

そう、私達はこの図2の左の絵のような人物がデマを流す、というイメージを抱きがちだ。だが実際にはこういう悪意の人はおそらく相対的に少数で、多くは右の絵のような善人が良かれと思って周囲に広めてしまうのだ。

この2枚の絵が学生たちに与えるインパクトはかなり大きく、こんな感想が相次いだ。

「とても自分に当てはまりました。皆の事が心配だったり、早く知らせてあげたいという気持ちで、デマを流してしまったこともあります。」
「私は『この人が嘘をつくはずがない』と思って信じてしまうタイプだったので、右の絵を見てハッとしました。また、自分自身もデマを拡散するはずはないと思っていましたが、その考えは浅墓で、もしかしたら私が加害者になってしまう可能性があると思うとゾッとしました。」

また《密接情報》で更に手強いのは、「親しい友人の言う事を疑ったら気まずくなるから、信じる」という“自主的同調圧力”パターンだ。そんな学生には、メディアリテラシーの核心とも言える「(情報を)疑え」というキーワードのニュアンスを、ほぐして説くとよい。「疑え」とは、「相手(情報源)を嘘つきだと思え」という気まずい

ネガティブな勧めではなく、そこに他の情報源もプラスして「窓を広げて、もっと広い景色を見よう」という明るいポジティブな勧めなんだよ、と。“No,But”ではなく“Yes,And”のアプローチならば、気まずさの発生は避けられるから。

2. セルフ・チェックの4ポイント ▼

では、具体的にどうやって、窓(視野)を広げればよいのか。初耳の真偽不明情報に出会ったら、とりあえずつぶやくだけで踊らされなくなる4つのおまじないがある。いわば、デマ・ウイルスに感染しないための4種混合ワクチンだ。

①「まだわからないよね？」(＝即断するな)

知らない情報はとりあえず機械的にこうつぶやいて、すぐ友達に拡散せず自分の中で一旦止めよう。なんだ、そんな当たり前の事…と思われるかも知れないが、学生達の感想を見ると、この基本から教え込む必要性を痛感させられる。

「私は普段ニュースを見ると、へえ～そうなんだぁ～と思うだけで頭を使っていなかったから、下村先生の情報の受け取り方に驚きました」「私は情報を得るとき、結論だけ見て満足します。もし違和感を抱いたら違う結論を探し、また違うなと思ったら違う結論を…なぜなら、正確さよりもスピードを求めているから」「どうしても、嘘か本当かを瞬時に判断しなければならないような気がしてしまいます」「あっているのか分からなかったら、結果をすぐ出さなくてもいいのだと知りました」

——こうして一旦止めたら、以下の3ポイントでその情報をチェックしてゆく。

②「意見・印象じゃないかな？」(＝鵜呑みするな)

まずは、その情報を《事実描写》風の部分と《発信者の意見・印象》風の部分とに仕分けよう。

たとえば「中国・武漢には病原体研究所があり、そこからウイルス感染が広まったのでは」という噂話。学生達も目にしているこの情報は、②をつぶやいてよく見ると、前半部分の「研究所がある」は根拠も示されているが、後半部分の「そこから広まった」には、決定的な判断材料が(5月11日現在)示されていない。全く予備知識を持っていない話でも、こうしてザックリ仕分けてみれば、大学生どころか子どもでも「この部分はまだ決めつけるのは早いな」と嗅ぎ分けることができる。

この事例が教材として適しているのは、本稿執筆時点で《嘘か本当か、まだ正解が確定していない》点だ。なぜそれが、教材として長所なのか。既に白黒が確定済みの事例ばかり“後出しジャンケン”で分析してみせても、その学びを次回の現実には当てはめる力はあまり付かないからだ。学生達に必要なのは、《結果論から逆算する分析力》ではなく、《真偽不明の情報に遭遇した、その時点での応急対処力》なのだから。

③「他の見え方もないかな？」(＝偏るな)

こうして②で仕分けた《事実描写》風の部分の中にも、まだ事実の顔をした誤報や虚報は混じっている。それを識別するために、その情報を様々な角度から眺めてみよう。

プロのジャーナリストが駆使している《角度の変え方》の手法は多々あるが、このコロナ緊急事態下で学生達が最低限、大急ぎで身に付けるべき習慣は、《複数の情報源に当たること》。

しかし、そのために「もっと時間を割け」と言われても、真面目に実践する学生は少ない。「同じ所要時間のままでできる」方法を指導する方が現実的だ。例えば、あるキーワード検索で画面にズラッと関連情報が並んだ時、面倒で3項目だけ見て済ませたいなら、「上から3つ」よりは「言ってる事が違う3つ」を選ぶ方がマシだよ、

と私は勧める。その方が多角的な見方を得られ、戸惑うことで拙速な決めつけから逃れることもできるから。

④「隠れてるものは無いかな？」(＝中だけ見るな)

最後にとても重要なのは、ニュースだろうと友達とお喋りだろうと、《情報とは全てスポットライトである》という基本認識だ。スポットライトである以上、そこには《周囲の暗がり》が必ずセットで存在するので、照らされている中だけ見て「これが全てだ」と判断しないこと。例えば、この絵のように。



図3

この例は、学生達には説明不要で大いにウケた。「(コロナ自粛せず)外を出歩いている若者を映して、若者全員の危機感が薄いかのように報道され、それをうのみにした中高年層に尤もらしい顔で苦言を言われるのは、本当に心外でした。私達きちんと外出を自粛している若者は当然、街中を映した映像には映りません。スポットライトが当てられている情報だけを見て判断するべきではないのだ、と身をもって知るいい機会となりました」「私はずっと家の中にいる。そんな中で遊び歩いている人たちだけのニュースを見ると、色々なことを我慢して自粛している意味ないんじゃないか、と思えて来てしまう」

これは、デマでも悪意の隠蔽でもないが、スポットライトの副作用でミスリードに導かれや

すい典型的なパターンの情報だ。

このように、実はこの4ワクチンは、デマ対策だけでなく、「事実だが一面的な情報」等に振り回されぬ眼力をも養成してくれるのである。

3. 「ソウカナ」で、たくましい眼力を▼

以上4つの小見出しの()内を再掲すれば、①ソク断するな／②ウ飲みするな／③カタよるな／④ナカだけ見るな——頭文字を並べると「ソ・ウ・カ・ナ」。初耳の噂話に接した時は、とにかくまずソウカナとつぶやいて情報災害の《減災》に努めることを、学生達に伝えたい。

お気づきの通り、本稿で述べた事は、コロナ・デマ感染防止策であると同時に、平時の一般的なメディアリテラシー教育としても全てそのまま通用する。私は20年ほどこの教育実践を続けてきたが、今ほど学生達のこの分野への学習欲求が高まっていることはかつてない。本稿の随所で引用した彼らの先月の授業感想文は、受講生152人が何の字数ノルマも無いのに16万字以上も書いてきた、熱い反応のごく一部だ。

「真偽を見極めるのが重要とはよく言われてきたが、その見極め方の例を具体的に教わることはなかったのも、とても参考になった」「SNSに頼りっぱなしの私にはとてもありがたいです」「明日から実践します」「この授業で知った事を色んな人に教えて、皆で協力してコロナ騒ぎを乗り越えていきたい」

——需要(いい加減な噂に振り回されたくない、と言う学習動機)も供給(次々に登場する教材向きの眉ツバ情報)も急増する中、この現実と直結したメディアリテラシー教育を全力で展開してゆくこと。情報の混乱によって世界が無用な不安・恐怖・偏見・対立に陥ってゆくの、阻止すること。それは今、コロナ禍に対峙する私たち大学人の、喫緊のミッションである。